

性格から見た運動と月経

平松眞兵衛
水谷英三
木村昭光
篠田道子

緒言

我々は曩に学生・生徒の健康管理について、女子の生理的現象において発来する月経が日常の生活殊に学校生活の如き集団的に行動するものにおいて、如何ように精神的・肉体的指導の面に影響を及ぼすものかどうか。またこれが健康管理の要点ともいふべき基本を樹てる目標を得んとしてアンケートによって学生・生徒の月経時の自覚的症狀を赤裸々に記録せしめたのであった。そしてその結果、我々の関心を深めたことは、先づ第一にこれ等学生・生徒は総じて發育完成までの發育旺盛の年令層にあるために栄養はもとより生活環境の影響は敏感に享受する傾向が強いのと、殊に男子と異り、女子は特に内性器の發育に伴う精神的・肉体的の成熟度は、月経周期の發来をも左右するもの、また引いてはこれが影響の甚しきものにおいては、氣質の現われにも関係するようにも思われる。故にたとえ月経そのものは女性としての生理的一現象とはいえども、学校における健康管理の立場からみると、絶えず指導の任にあるものの考慮すべき要あることを痛切に感ずるのである。

よって我々は体育指導の面から考えて、運動競技の如き多少とも生徒各自に教養の上に興味をもって、自主的に進んで行動するが如き場合においても、これが健康管理の衝に当るものの心すべき点を探究する意味から、このアンケートに平衡して意志氣質の検査を特に運動選手ともみるべき生徒に行つて将来の対策を樹てる資料を求めるとしたのである。

1 調査事項

- (1) 月経について
 初経は昭和 年 月 日 満年齢で
- (2) 月経の有無
 まだない 順調である 不順である 判らない
- (3) 月経の間隔
 毎月 日毎にある 不定である
- (4) 月経の持続日数
 2日 3日 4日 5日 6日 7日 8日 9日 10日
- (5) 月経中に起る障害
 何も感じない 何となく気持ちがわるい ゆううつである 怒りぼくなる 物事にあきやすくなる
 落着がなくなる めまいがする 頭痛がする 頭が重い 腹痛がする 下腹が重い 腰がはる
 吐気がする 身体が熱ぼくなる 肩がこる 眠けがする 鼻血が出る 便秘 下痢 その他何でも
- (6) 月経中の感想
 (イ) 月経中に先生の講義を聴いてふだんと変りなく勉強できますか 例えば数算は覚えにくいとか、自分の感じることありのままにかいて下さい。
 (ロ) 月経中に運動できますか
 1 全然できない。
 2 少し位できるとすればどんな運動ならできますか。
 3 できる。

以 上

〔第1表〕 月経の有無別

学別	年齢別	調査人員と月経の有無別				
		全人員	有	%	無	%
中学生	12才	127	54	42.52	73	57.48
	13〃	131	103	78.63	28	21.37
	14〃	133	127	95.49	6	4.51
	15〃	5	5	100.00	—	—
	計	396	289	72.98	107	27.02
高校生	15才	122	122	100.00	—	—
	16〃	136	136	100.00	—	—
	17〃	104	104	100.00	—	—
	18〃	6	6	100.00	—	—
	計	368	368	100.00	—	—
短大生	18才	51	51	100.00	—	—
	19〃	30	30	100.00	—	—
	20〃	46	46	100.00	—	—
	計	127	127	100.00	—	—
合計		891	784	87.99	107	12.01

性格から見た運動と月経

2 調査人員

この調査を始めるに当っては、先づ我が学園のものを対象として調査したのであるが、これが回答を得た数は八九一名で、これを学別にまた年齢別にして、月経の有無の関係を見ると、次の如きものである。

この第1表を見ると、全員八九一名のうち初潮を経て月経を周期的にみているものは、七八四名の八七・九九%と、大体八割八分で、残りの一〇七名の一二・〇一%と一割二分のものが

	調査人員						
	年齢	非運動選手			運動選手		
		A	M	無	A	M	無
中学生	12	118	52	66	9	2	7
	13	100	79	21	31	24	7
	14	86	82	4	47	45	2
	15	3	3		2	2	
	計	307	216	91	89	73	16
高校生	15	98	98		24	24	
	16	104	104		32	32	
	17	85	85		19	19	
	18	5	5		1	1	
	計	292	292		76	76	
短大生	18	51	51		46	46	
	19	30	30		42	42	
	20	46	46		2	2	
	計	127	127		90	90	
合計		726	635	91	255	239	16

一七一

調査人員				
運動選手	運動型	51	239人	21.5%
	思慮型	117		48.5
	進行型	12		5.1
	不定型	59		24.8
非運動選手		635人		

未だ初潮をみないでいることになっている。今これを年令別にして、学別をみると、月経の無いものは、中学生のもので、年令で見ると、十二才のもの一二七名のうち七三名の五七・四八%と、約六割弱のものは初潮にみるに至っていない。それが十三才になると、一三一名のうち二八名の二一・三七%と二割強までに減少し、更に十四才に達すると一三三名のうち僅かに六名の四・五一%の少数となり、十五才になると五名の全部が初潮を経過して、生理的にも内性器の發育を中心に身心共に女性的即ち婦人らしい正常の發育の段階において、増進しつつあるものと見受けられるのである。従って高校生・短大生においては發育上些の懸念もなく、順調な成育の途上にあると共に、また完成の年令に達しているものとみてよいように思われる。

体育指導から見たの運動競技

文部省の方針に基く学校における体育の指導は、小学より中学・高校の差別なく広く重要課題として奨励せられ、従って現今学校においての運動競技は性別をとわず盛んに行われている。このことは国民体位の向上の面から考えると、誠に喜ばしい現象といつてもよいことである。しかしこれを学校においての健康管理の立場から考えると、学生・生徒の個々の健康なり、また發育の姿勢などを考慮することなく一律に行うということは發育の途上にあつて、精神的はもとより肉体的にも、最も變動の烈しい注視を要すべき思春期の年代にあつて、殊に初潮後の正常の周期を見るに至るまでの、中生時代のものにあつて、發育に伴う身心に及ぼす生活環境の影響の著しいもののあることは、既に判然としてゐるところで、特に内性器の發育に伴う身体の運動からくる加重と、疲労などの関係は、個性的に、氣質の上からみても、月経時の心理的關係なり、またそれに伴う、異常感覚は、運動なり競技そのものの練磨向上の上にも、相当影響するものではなからうかという疑問ももたれるので、ここにこれらの關係を学生・生徒、個々について研究を進めて、対策を樹てたいと思ひ先づ広く調査したもののうちから、運動選手を抽出し、このたびはこれを中心にして、月経との關係をみることにしたのである。

運動選手と月経

[第2表] 運動選手と月経との関係

学 別	年 令 別	全 檢 査 人 数	運 動 選 手					
			人 員	%	月 経 有		月 経 無	
					数	%	数	%
中 学 生	12才	127	9	7.08	2	22.22	7	77.73
	13才	131	31	23.66	24	77.42	7	22.58
	14才	133	47	35.34	45	95.74	2	4.26
	15才	5	2	40.00	2	100.00	—	—
	計	396	89	22.47	73	82.02	16	17.98
高 校 生	15才	122	24	19.68	24	100.00	—	—
	16才	136	32	23.53	32	100.00	—	—
	17才	104	19	18.27	19	100.00	—	—
	18才	6	1	16.67	1	100.00	—	—
	計	368	76	20.65	76	100.00	—	—
合 計	764	165	21.60	149	90.30	16	9.70	

性格から見た運動と月経

我が学園に現在学のものにして、運動に興味をもって選手と見做されているものは、中学・高校生のみで短大生においては以前はともかく、現在では選手として活躍しているものはない。そしてまた、中学生においても、年令の低い一年・二年生では、比較的興味というか、或いは思春期における心身の変異などの関係か、割合に少いようにもみられる。今これが調査をまとめて見ると、次表の如くである。

この第2表で見ると、中学・高校合せて七六四名のうち一六五名の二一・六〇%の二割強のものが選手として、運動に参加しているの、これを学別に見ると、中学では八九名の二二・四七%のものが選手となり、また高校では七六名の二〇・六五%のものが選手となっている。この割合を見ると、両者ともに全体の二割強と相匹敵した割合となっている。しかしこれを年令別に見ると、年令の低い中学一、二年生頃の十二、三才の所謂思春期に達したものの或いはまた年令の長じた十七、八才の高校上級のものにおいては、女性としての性格にも、関係するものか、比較的運動に対する興味は、うすらぐともいうのか、低下しているようにも見受けられるのである。よって調査人員の少ないことは別として進んで自ら運動に興味をもって積極性に向上せんとする年令としては十四、五才より十六才位までの範囲のものが身心の健全なる發育に平衝しているように思われるのである。

そしてこれ等選手の月経の状態をみると、未だ初潮を経過していないものは、中学生のみで、年令では十二才のもの九名のうち七名の七七・七三%のものが無くて、十三才では三一名のうち七名の二二・五八%と、僅に一年の差に半数以上のものが初潮を経るに至り、更に十四才ともなると、その殆んどが初潮を経て四七名のうち僅に二名が未潮の状である。十五才のものは全部が初潮

は経過し、發育順調のようである。

〔第3表〕 中学全員と運動選手との月経有無比

学 別	年 令 別	非 運 動 選 手					運 動 選 手				
		人 員 数	有 の	%	無 の	%	人 員 数	有 の	%	無 の	%
中 学 生	12才	118	52	44.06	66	55.94	9	2	22.22	7	77.73
	13才	100	79	79.00	21	21.00	31	24	77.42	7	22.58
	14才	86	82	95.35	4	4.65	47	45	95.74	2	4.26
	15才	3	3	100.00	—	—	2	2	100.00	—	—
	計	307	216	70.36	91	29.64	89	73	82.02	16	17.98

更にここで中學生生徒と運動選手としての月経の関係を対比して見ると、上表の如くである。

この第3表に示すように調査の実数が少いので判然とした比率をみることは無理とも思われるが、しかし少数ながら、この数字の上でみると月経の無いものでは、先づ十二才では非運動者の五五・九四％に對して選手は七七・七三％と、未だ初潮をみないものが多いようで、また十三才では非運動者の二一・〇〇％に對して選手の方は二二・五八％と僅かの差であるが多くなっている。十四才のものでは非運動者の四・六五％に對して選手の方は四・二六％と、殆んど差をみないまでの發育の状を示し、これ以上の年令においては等差なく平衡的な内性器の發育をみているようである。

初 潮 の 年 令 比

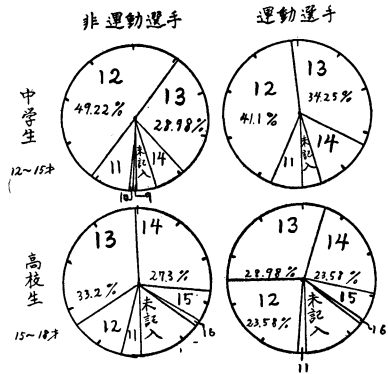
今回の調査によつて初潮の平均年令をみると、昨年の十三年四ヵ月より更に短縮して十三年二ヵ月と約二ヵ月早くなっている。これは今回の調査においては、運動選手を目標としたために短大生全部を除外したことが多少とも影響しているように思われる。

今更にこれを中学と高校とに分け、そして非運動者と選手との初潮平均年令をみると、中学生では非選手の群は十二年九ヵ月と更に短縮しているが、選手の方は十三年一ヵ月で本年の平均年令と約一ヵ月の早来となっている。そしてこれが高校生になると非選手、選手と差別なく、ともに十三年七ヵ月となり本年の平均より約五ヵ月遅れていることとなるのである。

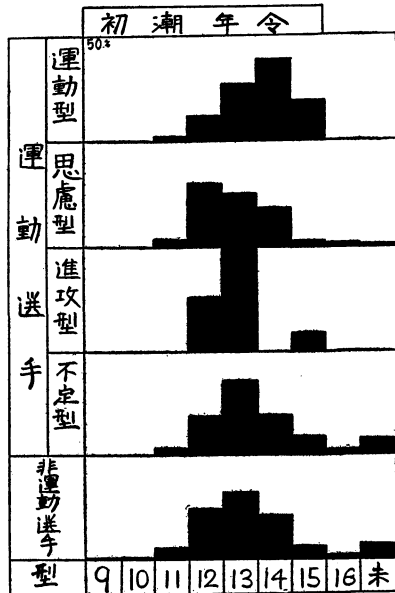
斯く年を新らしくするほど初潮年令の短縮し早期發来の傾向をみることは、唯に生活環境の影響と發育の効果の上にただに期すべきものであるか甚だ興味を引く問題のよう

に思われる。

初潮平均年齢



運動選手 の 性格



体育の指導に伴う運動に対する競技心の向上は、選手として練習を重ねるに従って非運動者に比して、性格的に何等か或はまた肉体の發育に平衡するか、或はそれ以上に関心を深める異常の傾向をみるものがあるのではなからうかという問題も起つて来る。そこで我々は桐原葆見博士の考案になる意志氣質検査の方式にならって選手の氣質の検査を行ったのであるが、この検査による結果をプロフィールによって類別した。項目の概要を示すと、

- B 決断の速さ
 - C 動作の速さ
 - D 運動の能
 - E 比 2B/2A
- 運動性の検査

性格から見た運動と月経

F	意志動作の拡張度	
G	妨害に抵抗する意志的発動度	}
H	自信の強さ	
I	決断した処えの決定性	進攻性の検査
J	衝動の意志的抑制	
K	眼と手との共同動作の精密度	}
L	細部への関心の大小	
M	一事に固執し用心する度	思慮性の検査

このBCD……の記号は各個人の検査結果を図示するときを使用するものをここに付けたので、そしてAを欠ぐことは別の方法によつて検査する一般智能の水準をAとするためである。そしてこの意志プロフィールは各人各様であるが、その大体の傾向から類型し分類すると、次の如き各型即ち意志氣質類型となるのである。

この全体的のプロフィールの高さからみて積極型、消極型、不定型とに分たれるのであるが、前者は全体として段階の一般普通人である中央よりも上に位するものであり、また消極型とはこれに反して全体として普通人よりも下方に位するものである。また不定型とは上下種々交錯して何れとも定め難いものである。この積極型に属するものは衝動が強くて、しかも合目的に意志的調整にすぐれ動作もまた敏活であり、且つ思慮深いものである。消極型はこれに反するものである。なおこの検査の性質からこの運動型、進攻型、思慮型の他にこれ等の混合型と不定型とを分けることが出来るのである。そしてこの運動型とは決断の早さ、動作の速さ、運動能並びに他の二者の比において比較的高い段階にあって、その他のものにおいて低いものである。進攻型には検査作業中進攻性を示すところの拡張度、意志的運動の駆御、自信の強さ、決断の決定性などにおいて比較的高い段階にいて、その他のものにおいては低い位置にあるものである。また思慮型とは運動の抑制目と手との協応の精密さ、細密への関心或は細心度及び一つの仕事への執着心において比較的高位を占め、その他において低いものである。しかしこれ等の他に混合型として運動及び進攻性両方に高く、その他に低いものまた運動及び思慮性に高く、その他に低いもの或はまた進攻と思慮性と両方において高く、その他に低いものもあって、そ

〔第4表〕選手の種類別表

調査の対照						
種類	非運動者			運動選手		
	人員数	%		人員数	%	
運動型				51人	21.5	
思慮型				117〃	48.5	
進攻型				12〃	5.2	
不定型				59〃	24.8	
計				239〃		

れぞれ運動進攻型、運動思慮型、進攻思慮型などと名付けたものもある。なおその他にプロフィールにおける曲線の屈曲が不規則で、一定の型を定めることの出来ないものがある。これを不定型としている。

この類型を従来の精神的気質の類型と称せられているものに對比してみると、運動型は多血質に相応し、進攻型は胆汁質に、思慮型は神経質或は憂鬱質にそれぞれ相応し、不定型は粘液質と相照している。そしてそれはまた陽気、短気、陰気、平気とも相応しているようである。

今この意志気質検査によって、その結果を纏めてプロフィールによって類型してみると運動選手は、上表のように類型されるのである。

今回調査した選手の気質の類型をみると、第4表に示すように所謂混合型のものはなく、全調査人員二三九名のうち思慮型のもの最も多く一一七名の四八・五%となり、次ぎは不定型のもので五九名二四・八%となり、次ぎは運動型の五一名二一・五%で進攻型は僅かに一二名の五・二%の少数となっている。この類型比の傾勢から推すると、運動競技に自主的に興味をもって選手となるものも女性たる性格の本能の現われか、進攻型はもとより運動型の如き積極性のもものは以外に少ないように見られるのである。

気質類型と初潮との関係

調査人員の少ないのに、この類型から生理的現象として発来する初潮の年令的關係を論ずることは多少軽卒のようにも考えられるが、着手した段階の一步としてこれが類型別に平均年令を示すと、

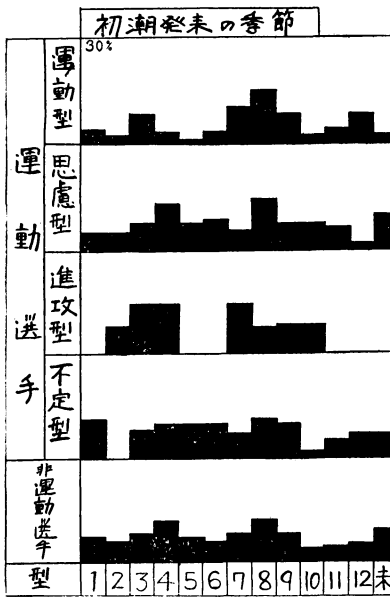
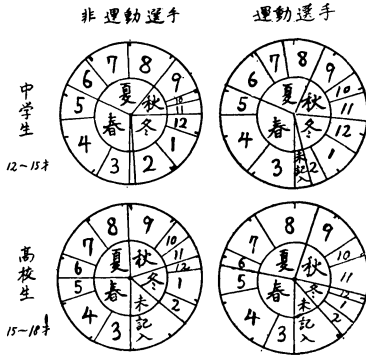
一三年六ヵ月

一二年一〇ヵ月

一二年一〇ヵ月

運動型のもの
思慮型のもの
進攻型のもの
性格から見た運動と月経

初潮発来の季節



この発来季節的關係については、我々曩に報告（論叢第一号）したものでは春季が最も多く、次ぎが夏季となつてゐるが、今回の調査においては多少調査人員の範囲は中学・高校生と狭まつてはいるが、しかし発来季節は前回同様に春季に最も多く三一・五一%となり、次ぎが夏季の三〇・五一%で、秋冬の順に低下してゐる。この季節の關係からみると、運動競技などとは殆んど初潮発来の上には相関々係がないように思われる。

初潮発来の季節的關係

となつてゐる。そしてこれ等運動選手に非運動者の平均年令一三年二カ月に比較すると、運動型以外のものは総じて早期発来を示してゐるようになり得る。

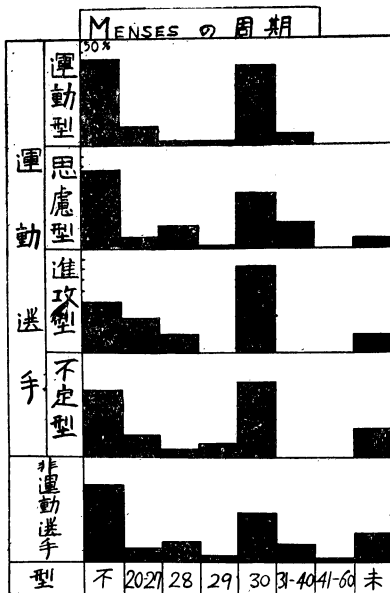
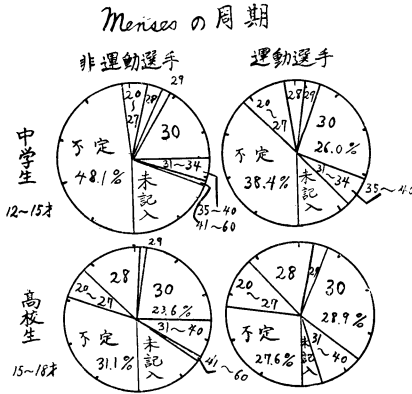
不定型のもの

一三年一カ月

〔第5表〕 月経周期の比較

選手別	周期							
	不定	20-27日	28日	29日	30日	31-40日	41日以上	未記入
選手	35.47	8.12	6.84	2.56	32.91	7.69	—	6.41
非選手	36.9	5.7	9.80	1.9	22.2	8.3	1.1	13.9

性格から見た運動と月経



我々が昨年報告（論叢第一号）した学生・生徒の月経周期においては、三十日型のものが最も多く全体の二六・二八%、次ぎは二十八日型のもので一二・一六%となっている。小畑氏の研究を始め近時研究の多くは日本婦人の周期は、二十八日型よりも三十日型の多いことを報じたために、これが壮年婦人としての型のようにも思われる。しかし未だ發育完成に至らない学生・生徒殊に中学より高校に至らむとする年令のものにおいては、これが周期を正確に判知し得るまでの経験に乏しいことなどから、従って正確に周期を定めることは自ら困難なことと想像されるものがある。これ等の点から考えると、自然不定期と称するものが多いことは、昨年のも四〇・二八%を見てもうなづかれるところである。今回の調査のものをまとめてみると、前回のもの同様に、不定期と称えるものが、やはり多いようであることを表示してみると、上表の通りである。

こんどの調査は選手なるものを目標としたことが報告する内容に、多少差異のあるものと推想して調査に着手したのであるが、結果からみるとこの周期の如き、それが運動選手の有無にかかわら

〔第6表〕選手の意志気質と周期

周期 類型	不定	20— 27日	28日	29日	30日	31— 40日	未記入
運動型	41.2%	9.8%	1.9%	1.9%	39.2%	5.9%	—
思慮型	38.5	5.1	10.3	1.7%	26.5	12.8	5.1%
進攻型	25.0	16.7	8.3	—	41.7	—	8.3
不定型	31.4	9.9	3.3	4.9	18.2	—	13.2

ず不定とするもの最も多く、選手の三五・四七％に対し非選手は三六・九％と殆んど相匹敵している。このことは中学・高校生の年令層においては、前記するが如く経験の乏しさと發育未完成のもの多きことなどによるのではなからうか。

次ぎは三十日型のものが多くて、選手群では三二・九一％、非選手群では二二・二％と、その間約一〇％余の差を示しているが、このことは選手群の方が恰も發育良好のために正確に三十日型の所謂日本婦人としての正常型であるかの如く推せられるし、しかも実調査数をこの後重ねた上の判定をみないと、この比率差のみでは断言することは如何やとも思われる。次ぎに選手では二〇—二七日型で八・二二％となっているが、非選手の方では二八日型が九・八％と二位にあり、二〇—二七日型は五・七％で却って少なくなっている。その他三一—四〇日型など各変異の比率

差を示すことは、選手たることの有無よりも發育年令層より来る變異差の現われによるものが、大きく影響しているのではなからうかとも思われるのである。

次ぎにこれ等運動選手としての周期を彼等の意志気質の類型の上から類別してみると、上表の如きものである。

この第6表でみても不定のものは、総じて多いが唯進攻型のものが二五・〇％と特に比率の低いことは、進攻型の性格の現われともいふべき決断に富んでいることは、物事を判然せしめる傾向の強いことの一面の現われとも推せられる。またここにおいても三〇日型の最も多いことは同様であるが、進攻型は四一・七％と最も多く、次ぎは運動型の三九・二％で、思慮型は二六・五％、不定型は一八・二％と共に低位にあることは、神經質的に細心を払うという傾向からくる判断に鈍る傾向の強い現われの反面を示しているのではなからうか。次に三一—四〇日型のもの思慮型の一・二・八％が最も多く、運動型は五・九％と次となり、進攻型、不定型は欠けている。また二〇—二七日型では進攻型の一六・七％が最も多く、次ぎは不定型の九・九％、運動型の九・八％と低下し、思慮型は五・一％と最も少なくなっている。また二八日型では思慮型の一〇・三％で最も多く、次ぎは進攻型で八・三％となり、不定型、運動型は遙かに低下している。また二九日型では不定型のもの四・九％が多いが、他は殆んどい

べきほどの比率は示してないなど、観察を細かくすればするほど調査実績の少ないために判定に苦しむものがある。

持 続 日 数

持続日数についても第一回の報告で学生・生徒の傾向は主要判知することが出来たのであるが、今回の調査においては

その範囲は限定せられ中学・高校生の年令層のみで、そして運動選手を目標としたので、従って運動競技と月経との関連が生理的現象とはいえず、どのような身体的にまたときとして精神的感情に支配されるものか、ために月経の持続日数にも影響するのはなかるうかとの考えの下に、殊に意志気質の類型のうえにも現われるのではなかるうかをみたのが、上表のような成績であらわれたのである。

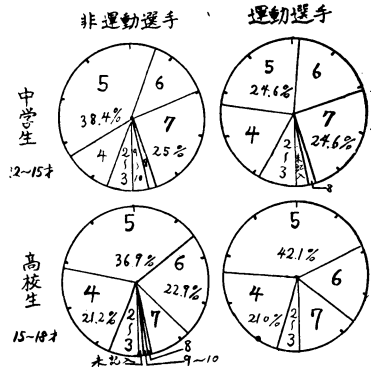
この第7表によって先づ気質類型をはなれて非選手群なり、また第一回の調査のものと対比してみると、第一回のものには短大生のもが含まれているので、年令層の範囲は多少拡大されている。しかしここで対比してみると、余り大きな変異はないようにみられることである。先づ持続日数の比率の上で最も多いものは、五日のもので第一回のものの一・五九%に対し、非選手は三七・八%と約六・〇%以上多い傾向をみせている。次ぎは六日のもので第一回の一・一六%に対し、非選手は一・九・八%と多少減少するが次となり、次ぎは四日のもので第一回の一・五八%に対し、非選手は一七・三%と多少増高の傾向はあるが同様三位となっている。その他は七日の第一回の一・六・九%に対し、非選手は一五・八%と多少低下するが同様の傾向を示し、二―三日位のものも遙かに減少している。これを更に改めて気質のうえで対比してみると、持続日数判知のうえには何等異とするものはないが、唯その間において日数を定める。例えば五日のものにおいて進攻型において四一・七%と、次に多い思慮型のを四・〇%も増高する傾向を示し、また四日ものにおいても進攻型は四

〔第7表〕 運動選手と持続日数

持続日数 類型	2-3日	4日	5日	6日	7日	8日
運動型	11.8%	29.4%	27.4%	15.7%	15.7%	—%
思慮型	5.7	20.5	37.6	14.5	19.7	0.9
進攻型	8.3	41.7	41.7	8.3	—	—
不定型	6.6	19.8	31.4	20.3	16.5	1.7
非選手	6.1	17.3	37.8	19.8	15.8	1.1
第一回 調査のもの	6.3	16.58	31.59	21.16	16.90	2.84

性格から見た運動と月経

Mensesの持続日数

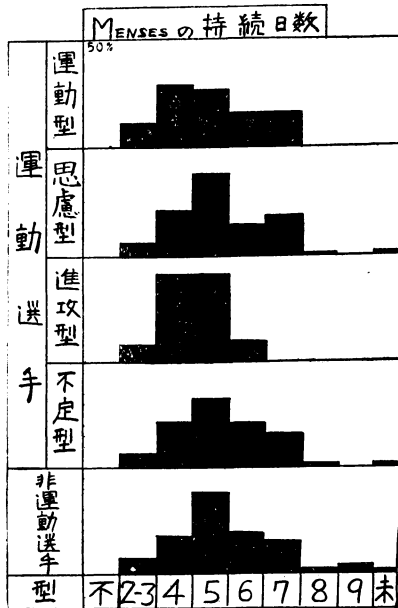


月経と運動との関係

一・七%と最も多く、次ぎの運動型の二九・四%を一二・〇%位も強い差を示すことは、これが少数の調査範囲のものとはいえ、氣質の半面を示す現われではなからうかとも思われるのである。

第一回の調査で学生・生徒の学校における体育指導の場合、月経時のものの運動可能の可否についての範囲をみると、その大部分五五・六%までのものは出来ると断言している。そして少し位出来ると聊か積極性を欠ぐ所謂妙令の女性としての謹みからの心がまえと申すか、また真に月経時の自覚症状からの考慮によるか、残りのうち四〇・一%位を占め、全然不可と断言しているものは僅かに三・二%強であった。この調査の現われを今回の運動選手を目標としての調査の上で対比してみると、第8表の如き傾向を示すのである。

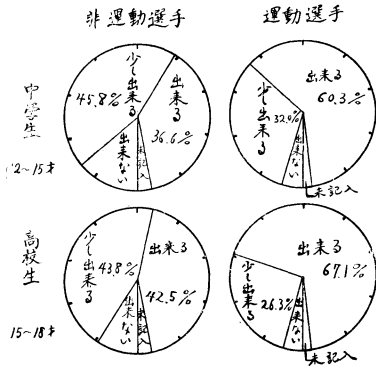
この第8表でみると、大体の傾向としては非選手群との間に大差がないようであるが、しかしここで細かく観察してみると、この間自ら各自性格の現われを示すものではなからうかと窺われるものがあるようで、例えば出来ると断言してい



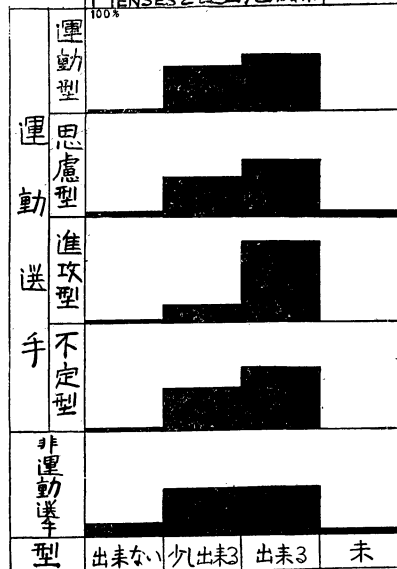
[第8表] 月経と運動の可否

可符 類型	出来る	少し 出来る	出来ない
運動型	52.9%	43.1%	3.9%
思慮型	54.7	36.8	3.4
進攻型	75.0	16.7	8.3
不定型	56.1	38.0	3.3
非選手	55.6	40.1	3.2

Menses と運動との関係



MENSES と運動との関係



るものにおいて進攻型は七五・〇%と遙かに最高の比率を示すことで、次ぎは不定型の五六・一%、思慮型の五四・七%、運動型の五二・九%と、余り大差のない傾向にあることである。次に少し位は出来るというものにおいては運動型のもの四三・一%と最高を示し、次ぎは不定型の三八・〇%を次とし、思慮型の三六・八%の順に低下し、進攻型のものに遙かに低下して一六・七%となっているのである。また全然出来ないというものと多少高い傾向を示すものとなっている。これ等の傾向をみると調査の実数の如何は別として、進攻型の如き積極性の強い類型を示すものは、意示の働きを自ら示しているようにもみうけられるのである。

月経の順、不順と運動との関係

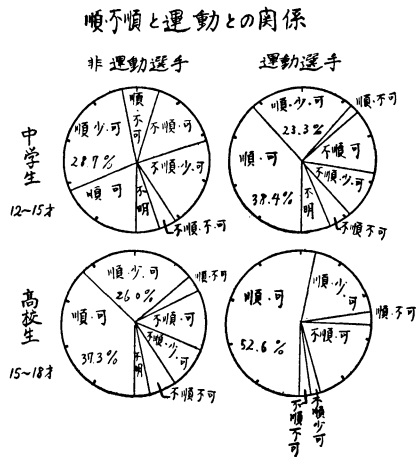
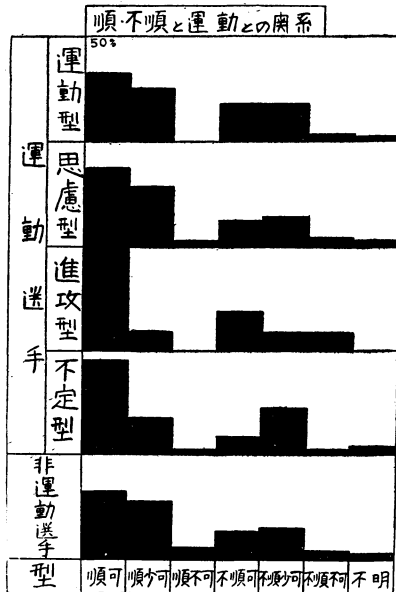
この調査において対象者の年齢からみて、その多くは發育未完成の生理的に身心の發育促進構成期の範囲に属するもので、従つて月経は生理的現象の現われとはいへ、未だこれ等の年代においては多少とも不順ともいへべき傾向にあること

〔第9表〕（気質）順、不順と運動との関係

類型	順		不順		不明	
	出来る	少出来る	出来ない	出来る	出来ない	不明
運動型	33.3%	25.5%	—	17.6%	17.6%	3.9%
思慮型	38.5	29.0	1.7%	11.9	12.8	3.4
進攻型	58.3	8.3	—	16.7	8.3	8.3
不定型	44.6	16.5	1.6	8.3	21.5	1.6

を示すのも止むを得ない現象とも考えられるのであるが、しかしこの不順の場合、これが運動選手として活動する上にどのような影響を与えているものかを、これが性格のうえから観察せんとしたのが、上表のような結果の現われを示しているのである。

この第9表をみて感じられることは、正常の経過をとる所謂順調な月経にあるものにして、出来ないと断言しているのは、気質のうえからでは運動型、進攻型のような、外向性の積極的のものにおいては全然みられないのであるが、これに反し内向性ともいふべき消極性の思慮型とか、不定型のものにおいては一・七%とか一・六%の如く僅かながらもみられるのである。このことは恐らく自覚的症狀の現われから来る傾向と推せられるのである。また不順のものにおいて、出来るといっているものはこれまた運動型の一七・六%、



〔第10表〕（気質）順、不順と障害のとの関係

障害有無 類型	順		不順		不明
	障害ない	障害ある	障害ない	障害ある	
運動型	11.8%	50.1%	7.8%	25.5%	3.9%
思慮型	18.8	52.1	3.4%	24.8	0.9
進攻型	33.3	33.3	33.3	—	—
不定型	21.5	46.2	8.3	18.2	3.3

性格から見た運動と月経

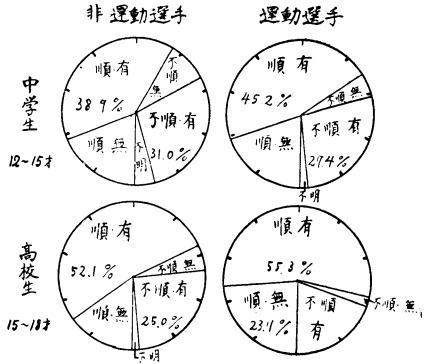
進攻型の一六・七%の如き外向性のものに多く、思慮型、不定型の内向性の傾向のものにおいては一一・九%、八・三%と低下している。更にこれを少し位を出来るというものでみると、不定型の二一・五%を最高とし、運動型の一七・六%が次となり、思慮型の一・二・八%が三位で、進攻型は八・三%と最下位と低下している。また全然出来ない、というものをみると、進攻型の一・三%が最も多くて、他は運動型の三・九%、思慮型の三・四%と低下し、不定型は一・六%と最下位となっている。その他順、不順をとわず判然しない不明のものは、進攻型には全然なくて、不定型の三・三%を一位置として、思慮型の二・六%、運動型の一・九%となっている。これらの傾向を総合してみると、進攻型とか運動型の如き外向性のもは決断力の現われとか、積極的性格の現われの強きために、少し位無理しても実行するという如き傾向を、この表において現わしていることがみられるのである。

順、不順と障害との関係

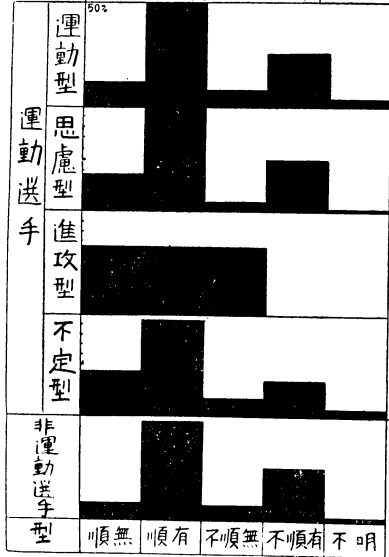
正常の経過をとる順調にあるものでも、多少とも何等かの異常感覚を自覚することは免れ得ない現象で、それが不順の傾向にあるものにおいては、更により多く自覚的症狀の伴うものあるは想像されるところで、従ってこれが各自の気質のうえからみて、殊に運動選手の立場から考えると運動動作に平衡して、どのような影響即ち障害ともみられる傾向を示すものかをみたのが、上の表である。

この第10表をみると、月経の順調な経過をとっていて障害がないと推想される健康な生理的現象を示すものにおいて、障害あると訴えているものは、思慮型の五二・一%を筆頭に、運動型の五〇・一%、不定型の四六・二%と順次低下して、進攻型においては三三・三%と遙かに低減しているのである。そしてまた不順であるにもかかわらず障害を訴えないものをみると、進攻型が断然多くて三三・三%となり、他は遙かに低下して不定型の八・三%、運動型の七・八%となり、思慮型は三・四%と進攻型の十分の一ともいふべき比率を示している。そしてまたこれが不順で障害あると訴えるものと比べると、運動型が二五・五%となり、思慮型は二四・

順・不順と障害との関係



順・不順と障害との関係



八%と大差ない状態にあるが、不定型では一八・二%と多少低下している。これに反し、進攻型では全然訴えるものがない状態で、そしてこれが不明のものをみると、運動型三・九%、不定型三・三%、思慮型では〇・九%僅かながら判然と訴えることを躊躇しているものがあるに反し、進攻型には全然みられないなどのことを総合してみても、特に進攻型にあるものの性格の現われのほどが自ら窺われるようである。

考察 及び 結語

昨三十年度の定期身体検査を基本に、在学全生徒に対してアンケートした。そしてその調査では、初潮の平均年齢は十三年四カ月であったところが、本年の同じような調査では、その平均年齢は十三年二カ月となって僅かに一年の間に約二カ月の早期発来を示しているのである。もっとも本年の調査では、運動選手を目標としたために短大生の一・二五名は除外して、中学・高校生のみについて行ったことも多少影響したのではなからうかとも考えられる。しかし何れにしても

年一年と女生徒としての内性器を中心に發育促進の早まりつつある傾向にあることは見逃せられない現象と思われる。

この初潮の平均年令を更に運動選手と一般生徒即ち選手でないものとに分けてみると、中学生では非選手では十二年九カ月となお短縮しているが、選手の方では十三年一カ月となつて全平均年令よりも一カ月短縮し、非選手の方では五カ月の短縮となつていたのである。

この初潮の發来と運動との關係については從來余り報告はないが、朝比奈氏は日本医事新報誌上質問に答え、元來初潮遅延や月経周期の不規則化を起す要因としては、(1) 栄養殊に V・E 及び V・A が問題とされ、(2) 氣候条件、(3) 遺伝的素因、(4) 生活環境なども重視されている。このうち栄養条件がスポーツに關係した因子と見られるわけであるとし、特に氏はスポーツの卵巣に及ぼす影響として動物実験の成績を示し、白鼠に行った激しい運動による各臓器の組織變化特に卵巣の變化について述べている。

それにはその動物は丁度人でスポーツを始める年令に相互する成長期のものを選び、そして雌白鼠に激しい運動を連日行わせていると、初め墮垢による性周期に變化がないばかりか、不規則に周期のものまで規則的になってくる。しかし更に運動を続けさせると、總ての動物が不規則な性周期を示すばかりか、やがて無周期となつてしまふ。この時期に中止すれば間もなく正常に恢復するのであるから、無周期に起る卵巣の變化は恢復可能のものである。このときの卵巣は組織的に次の如き變化を起している。全般に充血があり間質の増生傾向があるが、最も著しいのは卵胞發育の停止である。卵胞には卵細胞は消失して、所謂萎縮卵胞と呼ばれるもののみになる。そして正常に見られる各發育段階のものは現われな。そして正常に見られる各發育段階のものは現われな。従つて排卵はないわけである。これによつてみると少なくとも白鼠に關しては、卵巣は他の一般臓器組織に比して激しい運動に対して抵抗が強い。人でも若し同様なことが言えるならばスポーツによつて初潮が遅れたり、無月経になつた場合には、卵巣には勿論上記の變化が起ると推定されると言つてゐることをみると、我が学園におけるこれ等選手の多少とも、非選手のものより遅延の状即ち傾向のあることはうなずかれるものがあるようである。

またこれを高校生の方でみると、この方では選手、非選手の差別なく、ともに十三年七カ月となつて全平均よりも約五カ月遅延していることとなり、昨年調査の十三年四カ月に比べても約三カ月の差を示しているのである。斯く僅かなが

らも年一年と新期中学の一年生を迎えるほど、初潮發来の早期の傾向にあることは何を意味するものであるか。

従来気候風土生活環境による影響は初潮發来に密接な関係をもつと、となえられている。従って我が国においても九州地方のものより東北地方のものは多少遅いことのようにみられている。斎藤女史はこれについて鹿児島県下種子島、屋久島、竹島などの諸島において女生徒の初潮について、調べたものでは平均年令一四年一ヵ月、そして南の島と鹿児島本土を遠ざかるほど遅れる傾向がみられたのに、島によっては一五年一ヵ月ともいわれ、そして初潮の早いものの方が総じて身体の發育状態は良いといっている。また五日市、川名林氏などは東北地方の女生徒について調査し、初潮平均年令は一四年九ヵ月なりしと報じ、また柳瀬氏は金沢地方中学生の初潮について調査し平均年令一四年二ヵ月となり、先人の報告に比して早くなっているといっていることなどから推すると、現今の社会状況からみて都鄙とか気候風土などの関係よりは直接的な社会的生活態度などから受ける刺激の方が、むしろ著しいのではなからうか。ここにおいて松永氏の広島において、また戸川氏の島根においての女生徒についての研究の結果は、戦後の男女共学なることが初潮發来に相当著しい影響を及ぼすものがあるといっている。このことは確にある程度に刺激的影響のあることは考えられるところであるが、我が方の三十年度の調査なり、また本年の調査の結果においても全く共学を離れての女生徒を主体とする我が学園の生徒に斯く早期發来の傾向にあることは、共学もさることながら大都市における家庭生活を中心に、学校における生活態度の向上に伴う文化的否社会的環境の刺激は精神的にはもとより、肉体的發育の上にも相当の要素となっているものと思うのである。

運動選手の性格と初潮との関係

体育の向上から競技心をそそのかすの結果は選手として活躍するものには、体格体質の關係以上に個々の氣質が相当初潮發来の如きに、影響するのではなからうかという疑問を解決する方法として、この研究に着手したのである。しかしこれには相当広く且つ多数の選手について調査してみないと予期する正価は得られないのであるが、ここに甚だ僅かながらも調査によって得られた範囲において選手の氣質的類型によって初潮の關係をみると、積極性に富んだ外向性の進攻型のもものは十二年一〇ヵ月となり、またこれと正反対の性格ともいべき消極性の思慮型のものも、また同じく十二年一〇ヵ月と

なつて四類型のうち最も早い発来をみている。そして不定型の十三年一カ月が次となり、運動型のものは十三年六カ月で最も遅れているのである。

この進攻型の性格からみると、自信の強い決断の決定性など物事の理解と関心力の速いなどの気質から推察すると、自ら初潮の如き相当影響するのではなからうか。然るにこれに反して思慮型の内向性でとかく物事を狭義に、そして深く強く神経質的に考慮する傾向にあることなどが性的器官などの發育促進に、またこれが生活環境によつては刺戟する傾向を与えることとなるのではないかといふことは、平松の意志氣質と工場災害の發生との關係などをみても推考し得られるのである。従つて運動型の如く外向性のものであるにおいても、情緒的素質の上に粘液質性のものであることは多少共遅延するの傾向にあることは、進攻型に比して関心度の鈍いといふことも關係するのではなからうか。調査の進むとともに解決し得られることと思われる。

初潮発来の季節的關係

初潮発来の季節的關係については、前回の調査による報告と同様に、そして運動選手であると否とにかかわらず、また選手としての氣質的類型の上からみても、初潮発来に季節的關係は殆んど注視すべきものは認められないで一律に春季が最も多くて、夏季が次となり、秋冬と寒冷の季節に減少している。この傾向は運動との關係はもとより、氣質的類型のうちにも左程の關係はみられない。高橋氏の研究によると、東北から北陸地方の如き寒冷の地域、また大和田氏の北海道地方においての研究になるものでは、却つて冬季とか秋季などに初潮発来の傾向の多きことを報じ、その他三谷氏は長崎地方の調査にて春季より夏季に多く、秋季から冬の寒冷の候に減少すると報じていることなどから考えると、生活環境に伴う氣候風土習慣などの影響が相当広く關係するものようである。

周期との關係

月経の周期については、従来から28日型なるものが通説となつていたのであるが、小畑・岩田氏などの研究の結果は、本邦婦人は寧ろ30—32日型のものが最も多いとされている。そして正常月経の周期の範圍としては、生理的現象として27

—36日なることを示している。我が方の調査では、三十年の第一回調査において30日型が最も多く二六・二八%となり、28日型は一二・二八%で次となっていた。また今回の調査では、運動選手を中心に範囲は縮小限定したのと、短大生の如き發育完了の年令層にあるものを除いたのであるが、しかし調査の結果は選手であるなしかかわらず、第一回同様に30日型のものが最も多くなっている。このことは本邦婦人一般の社会的生活の趨勢ともいふべき傾向とみられるが、これを更に選手と非選手群に分別して運動による身体的労力の負担の加重などがある程度影響するのではなからうか、などの点を考慮してみると、同じ30日型においても選手は三二・九一%、非選手群は二二・二%と約一〇・〇%の開きをみせているのである。これを更に範囲を広げて所謂正常の周期の範囲に該当せしめて28—36日にして対比してみると、選手群は五〇・〇%と半数まで占めているのに、非選手では四二・二%と約八・〇%の開きをみせているのである。このことは女生徒として發育途上にある年令層に適應した運動そのものが、ある程度内性器の發育の上にも好影響を与えつつあるのではなからうか。

チーツ、佐藤氏などの研究によると、勤勞は月経に抑圧的に働くので、その主因は勤勞のために性器の位置形態異常が起り、また器質的变化は月経異常を来し、また勤勞に伴う環境の変化は心身の疲勞、栄養低下などが、卵巢の機能にも障害を与えると、松本氏はいっている。その他小林・梶本・元田氏などの特種業態婦人になるものなどに比較しても、我が方の女生徒の發育は順常に段階をとりつつあるといひ得るのである。

今この周期の關係を更に氣質的類型の面からみると、30日型でも外向性の進攻型のもは四一・七%と最も多く、次ぎは運動型の三九・二%となり、これと反対性ともみるべき、所謂内向性の思慮型の如きは二六・五%となり、不定型の如きは更に低下して一八・二%となっている。この傾向は氣質的にみて果して妥当な傾向を現わすものであるかは、この少數の調査の範囲において速断することは聊か輕卒とも考えられるので、この後の研究に俟つべきものとする。

持続日数と運動との關係

持続日数もまた周期と同じく内性器の發育状態なり生活態度など相当関連をもつのであるが、しかしこの調査の範囲のもの、初潮後未だ月経そのものについての經驗に乏しい年代の女生徒なので、従つてこれが判定については、ときに相

当迷いやすいではなからうか。例えば月経前数日来帯下の増加し、月経の近づくに従って血色調を帯び、遂に純血となるが如きその範囲の判定なり、また止血後の終末の半日位前後に一時止血し、再び少量の出血をみるとか、また人によっては止血後1—2日間位血性の分泌物を洩すことのあるが如き、これらの症状を考えると生徒の如き若小の年令層のものには思いやられるものがある。

しかしこの調査においても、前同様に持続日数としては選手の如何を問わず、5日のものが大多数を占めている。このことは第一回のもと同じ傾向でこれを全国的に調査した辻氏のもの、また山下氏の奉天における、その他橋川・三上氏の名古屋における、栗栖氏の三重における調査の如き、何れも5日のものが多いと報じている。その他岩田氏は月経の開始及び終末の明確に定め難いものが多いので、これが持続日数も自ら判断しない場合が少なくないといっているが、何れにせよ生理的現象として、現われる持続日数の範囲は、2—7日とみて誤りないことから考えると、我が方の今回の調査の結果からして、選手の如何に拘らず、その大部分のもの即ち九九・〇%までのものが、生理的持続日数の範囲にあって、健康に發育しているとみて誤りないことを示しているようである。

今これを選手群において気質類型の上からみると、5日型のうちでも進攻型のもものが四一・七%と最も多く、思慮型が三七・六%で次となり、以下不定型、運動型と低減している。これを生理的の範囲として、4—6日と広めてみると進攻型は九一・〇%と断然多く、次ぎは思慮型の七二・八%と殆んで伯仲した比率を示し、不定型は七一・五%と低減している。この氣質的性格から果して、このように進攻型の如き外向性の積極性の性格のもものが多数か否やは、なおこの後研究を進めてみないと周期との関係と同じく速断することは軽卒と思われる。

月経と運動との関係

我々は第一回の調査において月経に随伴して起る自覚症状の訴えをみると、これが肉体的の随伴症状として何等か感得するものは、中学生の六二%、高校生においては八八%、そして短大生においては九一%と、年令の進み所謂成熟完成の域に近い年令層のものほど、自覚度は高まっている。これを精神的随伴症状としてみると、これまた中学生の年令の低いものは五六%にして、高校生は七六%、短大生は七五%と、肉体的随伴症状と同様に年令の高いものに敏感になってい

る。これについて鈴木・高橋氏などの報告でみると、これが頻度は最高九〇%あるといい、そして病的ともみてよいほどの月経困難症を伴うものが塚田・森氏などの調査では三八%強もあるといっている。これらの調査成績からみても、学校における体育指導の面においての運動動作に当って彼女らの相当苦痛を、たとえ個人差はあるとしても感得していることは判然するところである。今この調査において、普通の運動は出来るというものは非選手群でも五五・六%と半数以上となっている。これを更に研究の目標としている運動選手の気質的類型によってみると、進攻型の七五・〇%が断然多く、そして次ぎは不定型の五六・一%、思慮型の五四・七%、運動型の五二・九%と相伯仲した比率を示している。これを一般非選手群の比五五・六%と対比してみると、進攻型以外の類型の上では殆んどみるべき等差は現われていないのである。

これに反して全然運動の出来ないというものでは進攻型の八・三%がこれまた断然多くて、次ぎは運動型の三・九%と進攻型の半数以下に低減し、そして思慮型、不定型と遞減している。この比率の傾向から推すると外向性の所謂積極型の進攻型、運動型の如きものが、自覚症状の如何に拘らず運動可能の可否なり判断の如きに自ら性格の一端を現わしているように思われるのである。

精神並びに肉体的動作の現われは意志の働き如何に左右されるものが相当大きいのである。平松は曩に某職工養成所の生徒について、この類型と災害事故との関係を調べたのであるが、その検査では思慮型ものが断然多くて六二・二%を占め、不定型のもの一九・一%、運動型七・八%、運動思慮型ものが七・〇%となり、進攻型は〇・四%、進攻思慮型は二・二%、進攻運動型は一・三%と何れにせよ外向性の進攻型運動に類するものは事故の少ないことを認めた。従って無事故者としては運動型ものが五五・五%と第一位を占め、次ぎは思慮型の三七・八%、不定型は三四・〇%と低下して、進攻型の上では甚だ少数でみるべきほどのものはなかった。なお平松はこれと同様某金属工場の労働者について、気質と災害の関係を調べているが、これまたその成績は養成所の生徒と等しい傾向を現わしている。これらのことから類推してみると、女生徒の月経時における運動の可能如何の判断否判定の上に、自らこれが性格的傾向を現わすものがあるようにみられるのである。しかしこれとても、なおこの後の調査研究をまつのであるが、我が方の調査の選手の気質的類型からみると順調でありながら障害があるものとして居るのは、思慮型の五二・一%を第一に、運動型の五

○・一%を次とし、不定型の四六・二%と低減し、そして進攻型は遙かに低下して三三・三%となっている。そしてこれに反して不順でありながらも障害がないと断言しているものは、進攻型の三三・三%が断然に多く、次ぎは不定型の八・三%、運動型の七・八%と低減し、思慮型は三・四%と低下している。そしてまた不順で障害があるとしているものは、進攻型には全然ない。然るに運動型には二五・五%、思慮型には二四・八%と相当の比率を示し、不定型は一八・二%となつてゐる。そしてまたこれとは反対に不順で出来ないとするものは、進攻型の八・三%を第一とし、運動型の三・九%を次とし、思慮型の三・四%、不定型の一・六%と低下している。しかしこの不順の場合において出来ないと判断と断言し得るものは、進攻型、運動型の如き外向性に多いことは調査の資料が未だ少数なるにもかかわらず、これら性格としての本来の氣質を現わしているのではなからうか。将来これが研究の進捗に伴つて解決し得るもののようにも思ふのである。

斯く資料の不充分ながらも観察を密にするほど、資料の不充分ということがあらゆる点において判断に悩むこととなり、従つて結論を下しがたいのを覚えるのである。しかし何れにしても体育の向上の面において、殊に運動競技種目と熟達練磨などにおいて、何等か意志的氣質とに関連性の深きものがあるように思われるのである。

順、不順とこれが障害との関係

月経の順、不順の差別は各自の自覚する随伴症状などと平衡して、日常の生活態度なり環境の影響が相当支配するものがあるようで、これについては鹿岡氏は興味ある報告をしている。それは青森区・角田区両路線におけるバスの車掌について調査したところ、山岳地帯の路線乗務員には、月経周期延長なり、持続日数の短縮また経血量の減少すとか、無月経、月経困難とか或は精神的苦痛などが比較的多いのに、平地路線の乗務員では、月経が前進し精神的影響なり、月経困難などが少ないと言つてゐるのである。そしてまたかかる障害は、未熟婦人つまり初潮後の若い年令層の人ほど多いと、岩田・井上・塚田氏等の言つてゐることなどを思ふと、これら月経の順、不順に伴う障害の表現度の如き、要は各自の意志の発動に左右されるものが相当多いようにも思われる。なおこのことは、安藤・鈴木氏等とか清長氏等の女工員についての調査になるもの、また菊地氏の銀行員についての調査などによつても窺われるのであるが、殊に氣質的類型の上から

みると順調の場合は勿論のこと、不順であっても運動の出来る、また少し位は出来ると断言し得るものは、外向性の性格たる進攻型を始め、運動型の如き積極性のものに多いように傾向がみられることで、従って運動による競技はもとより種目選択とか、向上の上にも相当関連性が現われて来るのではなからうかとも思われるのである。

順、不順と運動との関係

月経周期の不順不整のときによってあることは、女子として生理的現象であるとはいえ、ときとしては身心の態度など生活環境の影響のあることは、既に多数の研究報告によって明かなことである。殊に環境の刺激に敏感な思春期より発育促進の途上にある年令層のものに及ぼす影響の著しいことは、加藤氏の戦時中の昭和15-19年の五カ年間に涉り徴用女工員の徴用後一カ年間に涉って無月経の状となりしもの一六・五%、不順となりしもの七二・一%に及びしという報告をみると、その影響の著しいものあるは推知される。その他不順の訴えの多き傾向にあるものは女学生を始めとし、業種的關係をもつ勤労婦人においても比較的年令の若く且つ教養の高いともみられる女性に多き傾向のあることは、木宮氏の調査による不順のものは女工員二二・四%、看護婦四二・七%、女学生四九・二%などをみても裏付けされるのである。

我が学園の中学・高校生の如き年令層の女性としては、感情の複雑多岐なるもの多きために些細な学校の如き集団生活においても、時によっては想わざる感情の刺激が因となって亢奮の余波は、自律神経の働きにも影響し、内性器の機能にも変調的刺戟伝導ともなり、ひいてはこれが不順不調の変調を起すに至るのである。特に我々学校生活する女性として考えさせられることは、精神的刺戟によることで、既に塚本氏は学生の入学という環境の変化は月経期間の延長ともなり、また経血量を減少することともなっていると報じ、そしてこの変化の現われは内向性のつまり消極型のものに現われ易い傾向にあることなどから考えると、この調査の主標たる運動選手の意志気質類型の上からみて順調にあって、運動の出来るというものは思慮型の六九・二%を第一とし、進攻型の六六・六%が次となり、不定型の六二・七%、運動型の五八・八%と低減しているが、これに反して順調にありながら出来ないと言しているものは、思慮型の一・七%と不定型の一・六%のこの二類型のもので、他の外向性の進攻型、運動型のものとは全然ない。またこれに反し不順のものをみると、不順でも出来るといっているものは、運動型の一七・六%、進攻型の一六・七%の如き外向性のものに多くて、思慮

型、不定型の内向性ともみられるものには少ないのである。そしてまた不順のため全然出来ないと言断しているものは、進攻型のもの八・三%と最も多く、次ぎは運動型となり、思慮型、不定型と内向性の性格を現わす類型に少ない傾向を示すことは、自ら性格の一端を現わすもののようにみうけられるのであるが、如何にせ研究の第一歩にして未だ資料の蒐集に欠くるものあるはもとより内容の貧弱は、従つて確たる結論を得られないまま研究の第一歩としての報告にとどめるところとする。

一 攔筆するに当り池田学長、八木教授の御援助と山口君等の厚意ある供助に謝意を表す。

参 考 文 献

- (1) 平松その他 論叢第一号
- (2) 平 松 労働科学研究 第九卷第五号
産婦人科世界 第七卷第四号
- (3) 岩 田 産科と婦人科 (一九の一〇号)
- (4) 塚 本 意志氣質検査の手引
- (5) 桐 原 産婦人科の実際 (三の五号)
- (6) 小 林 十全医学会雑誌 (五七の一〇号)
- (7) 柳 瀬 日本産科婦人科学会東京地方会報 (四の二号)
- (8) 鈴 木 京都府立医大雑誌 (四八の五号)
- (9) 井 上 産婦人科の実際 (二の九号)
- (10) 菊 地 臨床婦人科産科 (七の一号)
- (11) 斎 藤 十全医学会雑誌 (五二の一〇―一二号)
- (12) 五日市外 印刷庁研究所報 (四の五号)
- (13) 秋山他

性格から見た運動と月経

(16) (15) (14)
朝 岩 太
比 田 城
奈

労働科学季報 (二の一号)
婦人科学
日本医事新報
一七〇九号